

2025/10/05

メッセージ：イエス様は私たちの避け所

おはようございます、OIC の皆様。「天の父なる神様の家」へようこそられました。
今回のメッセージでは、「イエス様は私たちの避け所（JESUS, OUR REFUGE）」というタイトルで、ヨシュア記から引き続きお話しします。

前回のメッセージ「DON' T GIVE UP（あきらめてはいけません）！」は、次の言葉で締めくくりました。

あなたがどんな助けを必要としていても、イエス様はあなたがご自分に近づこうとするその 1 歩 1 歩を見ておられます。

今日は、ヨシュアがカナン（約束の地）の領地をイスラエルの 12 部族（または氏族）にどのように分け与えたかを振り返ります。

そして、「避け所の町（Cities of Refuge）」を神様が定められたことによって表された神様の憐れみについても見ていきます。

<ヨシュア記 18 章 1 節 - 3 節>を読みます。

<ヨシュア記 18 章 1 節 - 3 節>

1・2 約束の地を征服したのち、といっても、まだ七つの部族は、神が与えてくださるといふ約束の地を征服したわけではありませんでした。イスラエルの民はシロに集まり、幕屋を建てました。

3 そこで、ヨシュアは言いました。「いつまでためらっているのか。主が与えてくださる地の住民を追い出しに行こうとしないのか。」

<ヨシュア記 18 章 1 節（2 節）>を読みます。

<ヨシュア記 18 章 1 節（2 節）>

1・2 約束の地を征服したのち、といっても、まだ七つの部族は、神が与えてくださるといふ約束の地を征服したわけではありませんでした。イスラエルの民はシロに集まり、幕屋を建てました。

前回の説教「Don' t Give Up（あきらめてはいけません）」というタイトルで話しましたが、ヨシュアはイスラエルの軍を導いて、敵として立ちはだかる組織だった軍勢をすべて打ち破りました。しかし、「完全な勝利」とは、今後に残っているカナン人の集団や抵抗の拠点を一掃するために、小競り合いのような戦いが続くことを意味していました。それは、すでにカナンで行われた大きな戦争と比べれば、ずっと小さな任務でした。イスラエルの各部族・氏族は、自分たちに割り当てられた領地において、その戦いを完了する責任を負っていました。つまり、全体として見ると、カナンの地はすでにイスラエルの支配下にあったのです。

イスラエルの 12 部族 マップ スライドを表示

イスラエルの 12 部族は、後に神様に「イスラエル」と名付けられたヤコブの 12 人の息子たちからもともと始まりました。その息子たちは、誕生順に、ガド、アシェル、ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、ベニヤミン、ダン、ナフタリでした。イスラエルの民が約束の地カナンに入ったとき、部族の構成は変わりました。レビは祭司の部族（レビ人）となりました。そしてヨセフは、彼の 2 人の息子エフライムとマナセによって、2 つの部族になりました。

いくつかの部族は、おそらくヨシュアの命令通りに積極的かつ果敢でした。彼らはヨシュア記 13 章で最初に領地の割り当てを受けました。

マナセ、ルベン、ガド

<ヨシュア記 13 章 8 節>

マナセの残りの半部族と、ルベン、ガドの各部族は、すでに、ヨルダン川の東側に相続地を与えられていました。モーセがあらかじめ割り当てておいたからです。

レビ

<ヨシュア記 13 章 14 節>

ただ、モーセはレビ族にだけ土地を割り当てませんでした。その代わり、彼らは神へのささげ物を受けることができました。

後に主はレビ人の祭司たちに、避け所の町の統治を任せることになります。

ルベン

<ヨシュア記 13 章 21 節 - 23 節>

21 ルベンの領地は、さらに台地の町々とシホンの王国をも含んでいました。シホン王はかつてヘシュボンに住んでいましたが、モーセの手にかかって、ミデヤンの他の君主、エビ、レケム、ツル、フル、レバともども打ち殺されてしまいました。

22 このほか、ベオルの息子で魔術師のバラムも、イスラエル人に殺されたのです。

23 ヨルダン川は、ルベン族の地の西の境界でした。

ガド

<ヨシュア記 13 章 24 節>

24 モーセはガド族に、その人口に見合った土地を割り当てました。 [地図を参照](#)

マナセ

<ヨシュア記 13 章 29 節>

モーセは、マナセの半部族に、その必要に応じて以下の地を割り当てました。

注記—エフライムとマナセの半分はヨルダン川の西側に位置します。 [地図を参照](#)

レビ

<ヨシュア記 13 章 33 節>

ただし、レビ族には土地を与えませんでした。あらかじめ申し渡されていたとおり、主ご自身が相続地だったからです。主が彼らの必要をすべて満たすのです。

「王である祭司」について、新約聖書を先に参照してみましょう。

<ペテロの手紙 I 2 章 8 節—9 節>を読みます。

<ペテロの手紙 I 2 章 8 節—9 節>

8 彼らのつまずきの原因は、神のことばに耳を傾けず、従おうとしないことですが、そうなるように定められてもいたのです。

9 しかし、あなたがたはそうではありません。あなたがたは神から選ばれた王なる祭司であり、きよい民として神のものとされた人たちです。それはすべて、どうして自分が暗闇から神の驚くべき光へと招き入れられたかを、人々に語り伝えるためなのです。

私たちクリスチャンは「王である祭司」です。私たちの王権は、「万軍の王、主の主」であられるイエス・キリストです！イエス様は、レビ人に与えられたもの以上に、私たちにとっての割り当て、相続分となってくださっています。レビ人の罪のようではなく、私たちの罪はすべて、過越の小羊であるイエス様の血潮によって洗い聖められています。この地上に、中国やアメリカのような大国、あるいは豪華で広い住まいでも、栄光の主イエス様ご自身が私たちの相続分であり、永遠の住まいであるというこの約束と比べられるものがあるでしょうか？

・
<ヨシュア記 18 章（1 節）2 節>

1・2 約束の地を征服したのち、といっても、まだ七つの部族は、神が与えてくださるといふ約束の地を征服したわけではありませんでした。イスラエルの民はシロに集まり、幕屋を建てました。

ある聖書の注釈（TLB 訳）では、これら 7 つの部族はカナンをさまよいながら、残っていたカナン人たちと物々交換をして生活していたと記されています。実際、イスラエルの民はエジプトを出て以来、旅の中で遊牧民のような生き方を学んできました。

これとは別の説が、Matthew Henry の聖書注解（MHC）にあります。それによれば

おそらくすでに隣接地に相続地を受けていたユダ族とヨセフ族は、まだ土地の割り当てを受けていなかった他の兄弟部族（7 部族）を、寛大にもてなしていたのかもしれませんが。そのため、7 部族は友人たちの立派な家を次々と訪ね歩き、自分たちの土地がまだ与えられていないことを不満に思うどころか、それを心地よく感じ、自分たちの家を持つことを気にしていなかったのかもしれませんが。

詳細がどうであっても、彼らが神様の「全地を占領せよ」という命令に怠惰でした。

Matthew Henry の聖書注解（MHC）で再び：

「もし彼ら（イスラエルの部族たち）が、神様から与えられた土地を所有しに行くとするれば、そこにある町々は建て直すか修復しなければならず、彼ら（イスラエルの部族たち）は羊や牛の群れを遠くまで連れていかなければならず、自分たちの妻や子どもたちを見知らぬ土地へ運ばなければなりません。こうしたことは、気遣いや苦勞なくては成し遂げられず、ある程度の困難を突破する必要があります。それゆえに、『しかし、風の状態が良くなるまで待っていたら、何一つなすことはできません。』＜伝道者の書 11 章 4 節＞というわけです。」

Matthew Henry が引用したこの聖句を読むと、イエス様が語られた「2 人の息子のたとえ」＜マタイの福音書 21 章 28-31 節＞を思い出します。

＜マタイの福音書 21 章 28-31 節＞

28 ところで、次のような話をどう思いますか。ある人に息子が二人いました。兄のほうに『今日、農場で働いてくれ』と言うと、

29 『はい、行きます』と答えたのに、実際には行きませんでした。

30 次に、弟のほうに、『おまえも行きなさい』と言いました。弟は『いやです』と答えましたが、あとで悪かったと思い直し、農場へ出かけました。

31 二人のうち、どちらが父親の言うことを聞いたのでしょうか。」「もちろん、弟です。」彼らは答えました。イエスは言われました。「確かに、悪人や売春婦たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入ります。

イエス様のたとえ話や伝道者の書に共通しているのは、「良い意志」は従順な行動に結びつき雲や天気をただ見てはいけないということです。

新約聖書の警告

私は、Matthew Henry が『ヨシュア記』のこの歴史を、私たちクリスチャンへの警告として用いていることに同意します。一部のクリスチャンは、信仰を否定することなく、安易な道を選ぶことがあります。（MLC）を引用します：

「神様はその恵みにより、私たちに良き地——天国のカナンの所有権をお与えくださっていますが、私たちはそれを手に入れることに怠慢です。信仰と希望、そして聖なる喜びによって、私たちはその安息に入ることができるのに、そうしていません。上にあるものに心を向け、私たちの会話（＝生活のあり方）をそこにおくことによって、私たちはもっと天国において生きることができるはずなのです。」

これはつまり、イエス・キリストの十字架における従順な犠牲によって、私たちのために「約束の地」である天国を買い取ってくださったということです。ここで「会話」とは、私たちクリスチャンの生活態度や生き方です。使徒パウロが＜コロサイ人への手紙 3 章 1-3 節＞で書いているように——

＜コロサイ人への手紙 3 章 1-3 節＞

- 1 キリストが死からよみがえられた時、あなたがたも共によみがえったのですから、天にある無尽蔵の富と喜びに目を向けなさい。そこでは、キリストが栄誉と力とを帯びて、神の右の座についておられます。
- 2 地上のことをあれこれ気に病まず、天上のことで心を満たされていなさい。
- 3 一度死んだわけですから、あなたがたの真のいのちは、キリストと共に天の神のもとにあるのです。

私たちが地上のことに心をより向けたり、集中したりして生きているとき、私たちは「霊的な祝福を所有することに怠慢である」状態にあるのです。私たちは、信仰と希望、そして聖なる喜びによって入ることができる「天国において生きる」ような安息に入っていないのです。私たちは、この世から離れてではなくこの世でいることは、地上での労働や問題に向き合う必要があることを理解しています。しかし、私たちが信仰を働かせて、天国に報いを積むことや、栄光に満ちた主が天から再び来られることに心を向けるとき、聖霊なる神様は私たちに希望と聖なる喜びを与えてくださいます！したがって、Matthew Henry が言っているのは、新約聖書において「怠慢である」とは、私たちの手の働き（行い）においてではなく、むしろ私たちの思いの持ち方や信心（献身）の在り方にすべてあるということです。

<ヨシュア記 18 章 3 節>

3 そこで、ヨシュアは言いました。「いつまでためらっているのか。主が与えてくださる地の住民を追い出しに行こうとしないのか。

彼らの勇敢な指導者ヨシュアは、正しくあった人であり、この怠惰で安易な道を選ぶ態度に心を痛めていました。彼が取った解決策は、彼らに定住させるためにその土地を 7 つの区画に分けて割り当てることでした。ヨシュアは、彼らがさまよい歩いたり、すでに定住していたイスラエルの民に頼って生活するのをやめさせることによって、罪に満ちたカナン人を取り除き、その地を自らの所有とするようになることを期待していたのでした。

このことが<ヨシュア記 18 章 4 節-6 節>で起こっているのを見ます。

<ヨシュア記 18 章 4 節-6 節>

- 4 さあ、各部族から三人ずつを選びなさい。その者たちに、まだ征服していない地を偵察させ、広さや分配方法について報告させよう。その情報に基づいて、土地を割り当てることにしたい。
- 5・6 偵察して来た者は、七区分に色分けした地図を作りなさい。私がくじを引いて、それぞれの地区をどの部族に割り当てればよいかを決めよう。

その 21 人の男たちは、それぞれがどの区画を受け取ることになるのかを知らないまま、土地を 7 つの区画に分けていたことに留意してください。誰がどの区画を得るかは、ヨシュアが聖なるくじを引くことによって、神様がお決めになるのです。これらの「聖なるくじ」とは、おそらく大祭司の胸当てに納められていたウリムとトンミムのことでした。

大祭司の衣服は、モーセを通して神様が指示されたものであり、それは幕屋を造るための指示の中に含まれていました。これは、イスラエルの民がまだカナンの約束の地へ向かって旅をしていた時のことです。

<出エジプト記 39 章 1 節>

次に、青、紫、緋色の撚り糸で、祭司用の式服を作りました。同じ生地で、アロンの聖なる装束も作りました。すべて、主がモーセに命じたとおりです。

新約聖書における意思決定

イエス様の使徒たちは、裏切り者ユダ・イスカリオテの代わりとなる人物を、神様に選んでいただきたいと願っていました。彼らは人目を避け、祈りの中で、父なる神様が聖霊なる神様を送ってくださるのを待ち望んでいました。

彼らは大祭司の衣服を用いることができず、また当然のことながら、大祭司は彼らの主であるイエス様を十字架にかけたように、自分たちの処刑をも望むであろう人物でした。

この出来事は、<使徒の働き 1 章 20 節-26 節>に記されています。

<使徒の働き 1 章 20 節-26 節>

20 実は、ダビデ王が聖書の詩篇の中で、『彼の家は荒れ果て、だれも住まなくなれ』『彼の仕事を、ほかの人に与えよ』と預言しているのです。

21 ・ 22 だから今、ユダの代わりにほかの人を、イエスの復活の証人に選ばなければなりません。選ばれる者の資格ですが、何と言っても、初めから私たちと行動を共にしてきた人でなければいけません。そう、イエス様がヨハネからバプテスマを受けて以来、別れを告げて天にのぼられるまでの間、ずっと私たちといっしょにいた人です。」

23 一同は二名の候補者を立てました。ユストというヨセフ〔別名バルサバ〕と、マッテヤです。

24 ・ 25 それから、ふさわしい人が選ばれるように、みな一心に祈りました。「ああ、主よ。あなたはすべての人の心をご存じです。どうぞ、ユダの代わりに、二人のうちどちらを使徒にお選びになるかお示してください。ユダは当然行くべき所に行ってしまいましたから。」

26 くじを引き、当たったのはマッテヤでした。こうして、ほかの十一人に、彼が使徒として加わることになりました。

こうして、11 人の使徒たちはくじを引き、その結果、マッテヤがイエス様の選ばれた者であることが示されました。多くの聖書学者は、彼らがまだペンテコステの聖霊なる神様を受けていなかったため、神様は彼らを叱責されなかったと信じています。

五旬節（ペンテコステ）の祭りは過越の祭りの 50 日後に始まりました。つまり、それはイエス様の十字架刑の 50 日後でした。

しかし、イエス様は明らかに、ユダの代わりとなる 12 番目の使徒として、使徒パウロを選ばれました。イエス様はパウロをお選びになるためにダマスコへ向かう道の途中で実際に天から現れました。

新約聖書には、マッテヤの使徒職が何らかの影響を及ぼしたことを示す記述はありません。パウロは、復活された主とのこの出会いについて、アグリッパ王に説明しました。＜使徒の働き 26 章 12 節-15 節＞。

＜使徒の働き 26 章 12 節-15 節＞

12 ところが、祭司長たちに任され、ダマスコに向かう途中、

13 あれは、ちょうど正午ごろでしたが、太陽よりもまばゆい光が、天から私と連れの者とを照らしたのです。

14 私たちはみな、その場に倒れました。その時です。私は、ヘブル語でこう語りかける声を聞いたのです。『パウロ、パウロ。なぜわたしを迫害するのか。そんなことをしたら、自分が傷つくばかりだ。』

15 『あなたは、いったいどなたですか』と私は尋ねました。すると主は言われたのです。『わたしは、あなたが迫害しているイエスだ。』

パウロは間もなく、油注がれた説教と教会開拓の賜物によって、当時の文明世界の大部分に大きな影響を与えることになります。

クリスチャンは、決して私たちの神様を「偶然の神様」にしてはなりません。イエス様こそが、天と地の主なのです。

ウリムとトンミムは、今や、内に住まわれる聖霊なる神様と、すべてのクリスチャンの祈りに必ず応えてくださる神様の誠実さに取って代わられています。

さて、ヨシュアは 21 人の男たちに、自分たちの任務を思い出させます。

＜ヨシュア記 18 章 8 節＞

8 そこで、調査隊は地図を作って、ヨシュアに報告するために出かけて行きました。その報告書に基づいて、ヨシュアはくじを引いて、その他をそれぞれの部族に割り当てることにしたのです。

スクリーンにスライド

イスラエルの部族への土地の割り当てと
カナンの地でまだ征服され占領されていない地域

まだ領地の割り当てを受けていなかった 7 つの部族は、ベニヤミン、シメオン、ゼブルン、イッサカル、アシェル、ナフタリ、そしてダンでした。また、指導者たちはヨシュアにも住むための土地を選ばせました。彼はエフライムの山地にある土地を選びました。

私は新約聖書の時代に生きるイエス様に従う私たちは天にある私達の住まいについての大きな確証と保証が与えられているということを記さねばなりません。日々必要なものを除いて、イエス様がクリスチャンたちに約束されている中には、地上の小さな王国や土地はありませんでした。イエス様の十字架刑の前夜、木曜日の晩に行われた「最後の晚餐」において、イエス様は弟子たちの未来の永遠の住まいを約束されました。私たちクリスチャンに与えられている栄光の約束は、＜ヨハネの福音書 14 章 1 節-3 節＞に記されています。

<ヨハネの福音書 14 章 1 節-3 節>

1 あなたがたは、どんなことがあっても、心配したりあわてたりしてはいけません。神を信じ、またわたしを信じなさい。
2 父の住んでおられる所には、家がたくさんあります。もしなかったら、はっきり言っておいたでしょう。わたしは、あなたがたを迎える家を準備しに行くのです。
3 すっかり準備ができたなら迎えに来ます。わたしがいる所に、あなたがたもいられるようにするためです。

イエス様はこの言葉を、皆が十字架につけられて殉教することになり、そして最終的には苦しみを受けるといふ神様の約束の中で、イエス様の最初の使徒たちに語られました。そして、使徒パウロに語られました。パウロは、ローマ皇帝によって斬首されることになります。

旧約聖書、『ヨシュア記』のような、神様の民のための土地を読むとき、私たちは使徒パウロがイエス様を信じる者たち——使徒でなかった、日々のクリスチャンたち——に語ったことを思い出さなければなりません。
それは<使徒の働き 14 章 21 節-22 節>に記されています。

<使徒の働き 14 章 21 節-22 節>

21 そこで福音を語り、多くの人をクリスチャンにしてから、ルステラ、イコニオム、アンテオケへと引き返しました
22 それぞれの町でクリスチャンたちに会い、ますます神を愛し、また互いに愛し合うように教え、どんな迫害にもくじけず、信仰にとどまり続けるようにと励ましました。そして、「神の国に入るには、いろいろ苦しい目に会わなければならない」と語りました。

避け所の町 **地図参照**

イスラエルの民は、エジプトを出てから約束の地に入るまでの間、長年にわたって戦いました。神様は、ご自身の民の心に「正義」という考えを植え付けたいと望まれました。神様の命令に従って、神様が裁かれた者を殺すという人間の心は、人の心を歪めやすく、本能的に暴力へと傾けてしまうことがあります。これは、現代の兵士たち——必ずしもクリスチャンとは限らない——の詳細においても見られます。過去 100 年の戦争の詳細な報道の中で示されているように、親友を殺された兵士は、「復讐心」で満たされます。戦争における殺害、つまり兵士としての任務は、聖書——神様の御言葉——で示されているように殺人ではありません。しかし、戦いにおける勝利を超えた復讐は、殺人です。

このことは、聖書全体を通して見ることができます。しかし、新約聖書においては、西暦 26 年、バプテスマのヨハネが大胆に、彼の話聞くすべての人々に、「あなたがたは罪人であり、悔い改めが必要だ」と宣べ伝えていました。

それでもヨハネは、ローマ兵たちにも同じことを語りました。

<ルカの福音書 3 章 14 節>

兵士たちも尋ねました。「私たちはどうすればいいのですか。」「脅しや暴力で金をゆすったり、何も悪いことをしない人を訴えたりしてはいけない。与えられる給料で満足なさい。」

ヨハネが語らなかったことが力を持っていることに留意してください。彼は、「職務の中で誰も殺してはならない」とは言いませんでした。彼は、兵士が自分の国に忠誠を尽くすことは、罪の問題ではなかったことを知っていました。ヨハネは敵兵との戦場での戦いではなく、個人的な力として兵士の立場を利用して市民を殺したり、奪ったり、支配したりすることに警告しました。

歴史を約 1410 年前にさかのぼると、＜ヨシュア記 20 章 1 節-3 節＞において、人の心における「殺し」について神様の知恵をみます。

＜ヨシュア記 20 章 1-3 節＞

- 1 主はヨシュアに告げて言いました。
- 2 「モーセに指示しておいたことだが、避難用の町を設けるようにイスラエルの人々に言いなさい。
- 3 知らずに人を殺してしまった場合、その町に逃げ込み、被害者の身内の復讐を逃れるためである。

神様はモーセに指示されたとおり、ご自身の新しい国イスラエルに、神様のもとに一致した部族ごとに構成され、律法の範囲外で復讐を行うことを拒む正義ある政府にしたいと望まれました。これは、イスラエルにおける新しい統治体制への大きな 1 歩でした。これらの「避け所の町」（[地図を参照](#)）は、それぞれの全ての部族にとって 1 日の旅で到達できる距離に設けられていました。レビ人たちがこの避け所の町の管理を任されていました。

＜ヨシュア記 20 章 4 節-6 節＞を読みます。

＜ヨシュア記 20 章 4 節-6 節＞

- 4 過って人を殺した者は、町に着いたら長老に会って事情を説明しなさい。彼らはその者を迎え入れ、町で暮らせるように一区画を与えてくれる。
- 5 たとえ被害者の身内が復讐しようと追いかけて来ても、偶発事故だったのだから、無実の殺人者を引き渡してはならない。
- 6 過って人を殺してしまった者は、正式の裁判まで、あるいは事故当時の大祭司が死ぬまでは、そこで暮らさなければならない。ただし、その後は自分の町や家に帰ることは自由である。」

レビ人の祭司たちが、これらの町それぞれの管理を任されていました。この祭司たちは、神様の民に新しい統治の形を拒絶したかった者に「神様への恐れ」を感じさせるものであったに違いありません。

[地図を参照](#)

これらの町の名前は、＜ヨシュア記 20 章 7 節-8 節＞に記されています。

＜ヨシュア記 20 章 7 節-8 節＞

7 避難用の町として選ばれたのは、ナフタリの山地にあるガリラヤのケデシュ、エフライムの山地にあるシェケム、ユダの山地にあるキルヤテ・アルバすなわちヘブロンです。

8 主はまた、エリコ付近のヨルダン川の東側にも、同じ目的で三つの町を設けるよう命じました。ルベン族の荒野にあるベツェル、ガド族の領地ギルアデのラモテ、マナセの半部族の領地バシヤンのゴランです。

イエス様 — クリスチャンにとっての「避け所の町」

<ヨシュア記 20 章 1 節-2 節>で見たように、

<ヨシュア記 20 章 1 節-2 節>

1 主はヨシュアに告げて言いました。

2 「モーセに指示しておいたことだが、避難用の町を設けるようにイスラエルの人々に言いなさい。

クリスチャンたちは、「避け所の町」の境界線であるイエス・キリストの十字架にまでたどり着きました。クリスチャンは、避け所の町に入るために自分の罪のために十字架のイエス様の犠牲を受け入れることによって、神様の招きを受け入れました。クリスチャンは永遠に安全なのです！

それは、イエス様が<マタイの福音書 11 章 29 節-30 節>で約束されたとおりです。

<マタイの福音書 11 章 29 節-30 節>

29 わたしはやさしく、謙遜な者ですから、負いやすいわたしのくびきを、わたしといっしょに負って、わたしの教えを受けなさい。そうすれば、あなたがたのたましいは安らかになります。

30 わたしが与えるのは軽い荷だけだからです。」

イエス様は、クリスチャンたちが地上でご自身が経験されたように、悪魔との戦いに直面することを知っておられました。しかし、イエス様は私たちの勝利を明確にされました。イエス様はご自身が<マタイの福音書 28 章 20 節>で、私たちとともに悪魔に立ち向かわれると言われました。

<マタイの福音書 28 章 20 節>

また、弟子となった者たちには、あなたがたに命じておいたすべての戒めを守るように教えなさい。わたしは世界の終わりまで、いつもあなたがたと共にいます。」

また、<ヨハネの福音書 16 章 33 節>においても語られています。

<ヨハネの福音書 16 章 33 節>

あなたがたも心配しないで、安心していなさい。こんなにも念には念を入れて話したのは、そのためなのです。確かに、この世では苦難と悲しみが山ほどあります。しかし、元氣を出しなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」

イエス様 — 罪人にとっての「避け所の町」

避け所の町は、カナンの地のどこからでも 1 日の旅以内でたどり着けるように配置されていました。この憐れみは誤って人の命を奪ってしまった者への神様の憐れみに満ちた御心

を示しています。神様は、ご自身の選ばれた民が、ご自身のようになることを望まれました。私たちの救いは、ただ「ひとつの祈りの距離」にあります。しかし、過失による殺人者とは違って、私たちは罪を犯しました。私たちは、実際に手を下さなかったとしても、心の中で人を殺しました。そして、罪を犯したのは必ずしも偶然ではなく、意図的に罪を犯し、意図的に人を殺そうとしたのです。私たちは、「避け所の町」のようなあわれみを受けるにふさわしくない者です。なぜなら、私たちは自らの罪によって、主を十字架につけてしまったのです。

イエス様の殺人に関する言葉

<マタイの福音書 5:章 21 節- 22 節>

21 あなたがたの教えでは、『人を殺した者は、死刑に処す』とあります。

22 しかし、わたしはさらにこうつけ加えましょう。人に腹を立てるなら、たとえ相手が自分の家族であっても、裁判にかけられます。人をばか呼ばわりするなら、裁判所に引っぱり出されます。人をのろったりするなら、地獄の火に投げ込まれます。

<マタイの福音書 5 章 21-22 節／MOUNCE 訳・ギリシャ語訳に基づく>

「昔の人々に『殺してはならない』、『人を殺す者は裁きを受けることになる』と言われているのを、あなたがたは聞いています。

しかし、わたしはあなたがたに言います。理由もなく兄弟に対して怒る者は、裁きを受けることになります。

また、兄弟に向かって『ラカ (raka) 』と言う者は、議会に引き渡されることになります。

(※「ラカ」とは、アラム語で強い侮蔑を示す言葉で、「無価値なやつ」といった意味です。)

さらに、『愚か者 (You fool!) 』と言う者は、火の地獄に投げ込まれることになります。

(※「モロス (moros)」はヘブル語に由来し、無分別な悪を行う「愚か者」という意味です。)

しかし、私たちは自分のすべての罪の完全な赦しと聖めのために、1日の旅をする必要はありません。イエス様こそが、私たちの「避け所の町」であり、すぐそばにおられるのです。イエス様は今ここにおられる救い主であられ、イエス様の救いへ至る道はとても短いのです。イエス様は、私たちの邪悪な心が、ご自身の十字架の血潮によって聖められる必要があることを知っておられます。イエス様は<マルコの福音書 7 章 21 節-22 節>でこう言われました。

<マルコの福音書 7 章 21 節-22 節>

21 肉欲、盗み、殺人、姦淫、

22 食欲、邪悪、あざむき、好色、ねたみ、悪口、高慢、あらゆる愚かさ、それらのものはみな、人の心の中からあふれ出ます。

あなたはこれらの罪から聖められるために、イエス様の十字架のもとに来たことがありますか？……あなたの邪悪な心からくる、これらの罪のために。

私はあります！！……そして、イエス様は私のあわれみを求める叫びを退けませんでした！私は、自分が地獄にふさわしい者だということ以外、ほとんど何も理解していなかった

た時でさえ、イエス様は私を聖めてくださいました。そして今もなお、イエス様の十字架はすべての人のために、すぐそこに、現実のものとしてあるのです。

自分自身の「善さ」へのいかなる主張も、ただ単純に放棄し、あるいは手放し、イエス様にしがみつき自分にとってのすべてとしてイエス様を受け入れることです。十字架であなたのために血を流し、死なれたイエス様のもとに来てください。その十字架を抱きしめてください……そうすれば、よみがえり、今も生きておられる救い主イエス様を見つけるでしょう。

カナンの地にある「避け所の町」へと通じる道は、殺人を犯した者が速やかに逃れることができるよう、注意深く、そして念入りに整備されていました。案内柱や標識があり、絶望的な人が死を逃れるための「避け所の町」を指し示していました。それと同じように、私が宣べ伝えているイエス様の福音のことばもまた、単純明快です。キリストは罪人のために死なれました。その罪人の中でも、私が最も悪い者です！この福音こそが、あなたを「避け所の町」へと導く標識なのです。

罪人よ、あなたの死は確実です。それは今この瞬間も、あなたを追いかけいています！聖書は＜ヘブル人への手紙 9 章 26 節-28 節＞で、これをはっきりと語っています。

＜ヘブル人への手紙 9 章 26 節-28 節＞

26 もしそうであれば、世の初めから、何度も死ななければならなかったでしょう。キリストは、この時代の終わりに、死によって罪の力を永遠に無効とするために、ただ一度おいでになったのです。

27 人間には、一度だけ死んで、その後さばきを受けることが定められているように、
28 キリストも、多くの人の罪のためにご自身をささげて、一度だけ死なれました。そして、もう一度おいでになりますが、今度は罪を取り除くためではありません。その時は、彼を待ち望んでいるすべての人の救いを完成させるために来られるのです。

しかし、もしあなたがイエス様のもとに来るなら、あなたの霊的な死は決して訪れません！あなたは決して裁きに直面することはないのです！ただし、時間を無駄にしてはいけません。道の途中でぐずぐずしてはいけません。なぜなら、「血の復讐者」は足が速いからです。もしかすると、今朝、すでに、「血の復讐者」があなたのかか頭に迫っているかもしれません。イエス様の十字架へ走ってください。あなたの罪のためのイエス様の死を受け入れてください。そうすれば、あなたは永遠に、あなたの避け所であるイエス様のうちに安全に過ごすことができるのです。

もし、あなたの内なる深いところで、神様がイエス様の十字架へと走るように促しておられると感じるなら……聖餐式の後、「Lift (リフト)」のサインのところまで、どうぞ単に歩いてきてください。私はそこであなたとお会いし、あなたのために祈りたいと願っています。

祈りましょう。

聖餐式 (Holy Communion)